

キンモンハモグリガの発生時期と防除法

環境部

1 背景とねらい

近年、これまでの防除対応でほとんど発生しなかったキンモンハモグリガが、県下各地で多発し問題視される状況になっている。この原因としては、薬剤に対する抵抗性を獲得したことが疑われるが、発生生態等も不詳であることから、防除法と併せて諸生態に関する調査を実施した。

2 技術内容

1) 発生生態の概要

(1) 雌だけが成虫態で越冬し、年間5～6回発生する。およその成虫羽化盛期は6月上旬(第1世代)、7月上旬(第2世代)、7月下旬(第3世代)、8月中・下旬(第4世代)および9月中旬以降(第5・6世代)である。

(2) 産卵は展開中もしくは展開直後の新葉だけに限られるので、被害は成虫出現時に伸長中の枝の上位葉に現われる。したがって、一般の園地での被害は少ない。

2) 防除法

(1) 多発の場合のみ、第2・3世代のいずれかを対象に防除する。

(2) 防除適期は産卵盛期～ふ化幼虫期であり、この時期以外での効果は劣る。

(3) 防除薬剤については、県病害虫防除基準を参考にされたい。

(4) 年次・地域によっては、キンモンホソガとの同時防除が可能であり、この場合キンモンホソガの羽化状況に応じて薬剤を選択する。

3 指導上の留意事項

(1) 防除適期は年次や地域により異なるので、県発生予察情報を参考にする。

(2) 第2世代対象の防除では、サビ果を発生させることもあるので注意する。

(3) 従来りんご園で広く用いられてきた有機リン剤の防除効果は劣る(試験成績参照)。

4 参考文献・資料

(1) 昭和63年度 新技術普及指導検討会資料(岩手県園芸試験場) 農村振興課

(2) 昭和63年度 果樹指導要項 岩手県

(3) 昭和63年度 環境部試験成績書 岩手県園芸試験場(印刷中)

5 試験成績

ギンモンハモグリガの防除効果 (62年、第2世代対象)

10新梢当り

供試薬剤	倍率	散布後の幼虫の令構成									
		散布前		散布後 被害痕	死幼虫			生幼虫			脱出
		卵	被害痕		1令	2令	3令	1令	2令	3令	
硫酸ニコチン	800	8.8	18.5	21.0	13.2	7.0	0	0	0.3	0	0.5
スプラサイドW	1500	15.8	15.0	15.8	12.8	2.5	0	0	0.5	0	0
サイアノックスW	1000	11.3	14.5	17.0	14.5	1.7	0	0	0.3	0.3	0.2
デミリンW	4000	12.3	12.8	16.0	8.8	5.0	1.2	0	0.5	0.3	0.2
無散布	—	10.0	17.0	33.8	0.7	2.8	4.3	0	3.5	6.0	16.5

散布月日: 6.13, 6.27 調査月日: 6.13, 6.27 品種: スター 成木

ギンモンハモグリガの防除効果 (殺卵効果)

効果優れる		ほとんど効果なし	
薬剤名	倍率	薬剤名	倍率
硫酸ニコチン	1000	サリチオンW	1000
スプラサイドW	1500	ダズバンW	1000
サイアノックスW	1000	ダイアノジンW	1500
マイクロデナボンW	1200	DDVP	1500
パーマチオンW	1000	エルサンW	800
アディオオンW	1000	トクチオンW	800
スミチオンW	800	キルバール	2000

ギンモンハモグリガとキンモンホソガの同時防除の可能性 (県中部内陸平年)

	6 月						7 月						
	1	5	10	15	20	25	30	5	10	15	20	25	31
キンモン		ピ...								...			
		デ.....										
			硫.....									
ギンモン					

...防除適期 ピ:ピレスロイド系 デ:デミリン 硫:硫酸ニコチン